

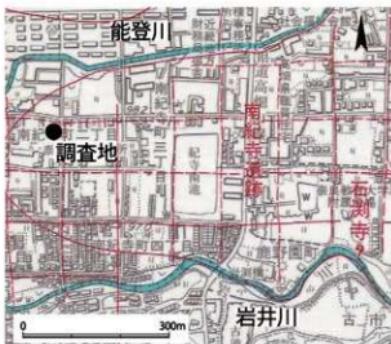
# 南紀寺遺跡の新知見

—古墳時代の水に関する遺構と河川—

南紀寺町

奈良盆地北東部、東から西へ流れる能登川と岩井川とに挟まれた扇状地に位置する南紀寺遺跡は、古墳時代の遺跡です。奈良市では、初めて遺構が発見された1990年以降、今回まで8回の調査を重ねてきました。これまで、水に関する祭祀の場、集落、河川などが発見され、遺跡の様相が徐々に明らかになっています。遺跡の範囲は、まだ明確ではありませんが、今回の第8次調査地は、これまでの調査の中で、最も西に位置しています。ここで新たな発見がありました。

発掘区は、南北に長い北発掘区と小規模な南発掘区の2か所を設定しましたが、南発掘区では、遺構がありませんでした。北発掘区では、河道とその北岸沿いに構築された石積遺構2.5m分がみつかりました。石積は幅0.4～1.0m、残存高0.4mで、上部は後世の水田による改変で破壊されていました。シルト・粘土の裏込め土を充填しながら、径0.1～0.2mの石を岸に沿って小口積しています。その前面には、部分的にやや岸から突き出すように、径0.3m程度の一回り大きい石を岸側に立てかけるように広い面を向けて据えています。石材の大半は盆地東山中の基盤岩である花崗岩で、片麻岩・チャート等も少量含みます。石積の隙間から布留式と呼ばれる古墳時代前期の土師器が出土しました。このほか、河川の北側で掘立柱列が見つかりました。



調査地位置図 (1/10,000)



河川と北岸の石積遺構（南から）



河川北岸の石積遺構（全体、南から）



河川北岸の石積遺構（部分、南から）

それでは、今回、新たに判明したことは、どのような点でしょうか。ひとつは、遺跡の時代・時期について、もうひとつは、遺跡の環境についてです。

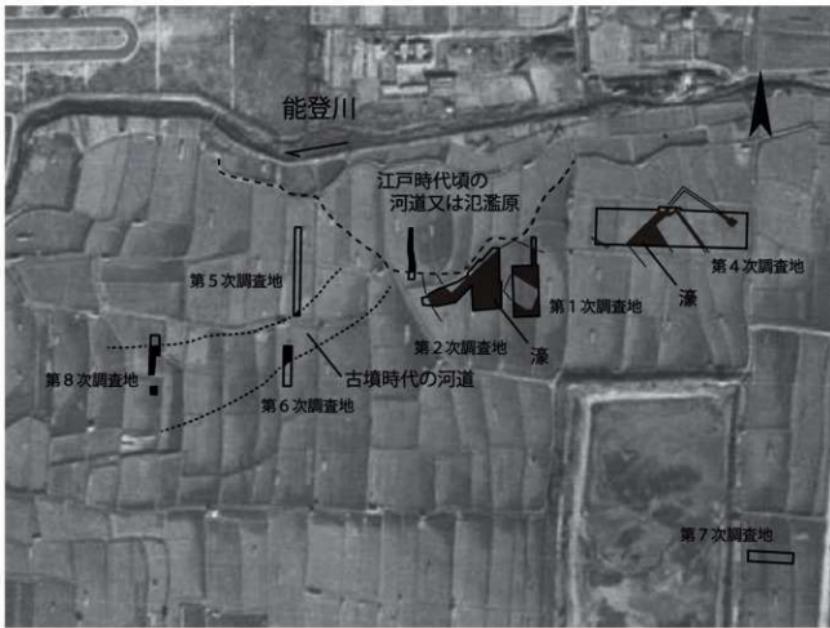
**遺跡の時代** これまでの南紀寺遺跡は、古墳時代中期～後期、飛鳥時代の遺跡と考えられてきました。それより古い遺物は、弥生時代の土器が出土するものの、遺構はありませんでした。今回の調査で、河道と石積が見つかり、布留式と呼ばれる土器が出土したことから、古墳時代前期にさかのぼって、川岸で何らかの行為を行っていたことが明らかとなりました。

**遺跡の環境** 今回の調査により、遺跡の中を流れる河川の位置が判明しました。これまで、第1・2次調査地の北側を能登川の旧河川が流れていたことは地割などからもわかつっていましたが、江戸時代の遺物が出土しており、古墳時代の遺構（濠）との関係が不明瞭でした。また、第5・6次調査では、それぞれ河道の北岸・南岸が見つかってお

り、その間を古墳時代の河川が流れていたことがわかつっていました。さらに今回の調査では、その河道の北岸を確認することができ、流れの方向がほぼわかつてきました。

これまでの発掘調査の結果と地割からみて、第1・2次調査地の北側の河道は、江戸時代頃の旧能登川であり、現在の能登川からみて、大きく南へ蛇行して、北へ戻っていくという形状を成しています。

一方、古墳時代の河川は、北東から南西方向に流れおり、第1・2次調査地の北側より上流では、江戸時代頃の河川及び氾濫により破壊されたとみられます。ただし、南岸については、流れの方向からみて、あまり変わらない位置にあった可能性があります。そして、第2次調査で発見された濠は、水路を通じて北西方向に流れしており、水路が古墳時代の河道に接続していたと推察することによって、遺構と河川との関係が明瞭になるのです。



南紀寺遺跡 遺構及び河川 （調査地付近の旧写真：1949年、米軍撮影 R548 - No.2 - 14）